

三越創業350周年記念特集 越後屋・三越物語

清水一郎さん(昭和48年入社 幹事)

イノベーター三井高利

1622年伊勢松坂に生まれた三井高利は、1673年江戸に越後屋を開業します。高利はここで画期的な商法を編み出します。いうまでもなく「現金掛け値なし」「店前売り」そして「仕立て売り」の3点セットです。高利のこの商法は現代でいうところのイノベーションであり、その商法は何と350年経った今でも受け継がれているのです。高利は同時に為替事業にも着手、金本位の江戸と銀本位の関西との為替をコントロール、この事業も後の銀行に受け継がれています。

高利のスゴさは現在にまで受け継がれているビジネスモデルを350年も前に構築していたというところにあります。2013年にフランスと日本の共同研究で越後屋は世界初の「量販店」で、18世紀中の売り上げは世界一であったことが判明しています。



危機を脱した越後屋

さて、時代は明治に進みます。日本は植民地になった訳でも、革命が起こった訳でもないのに自国の文化を捨ててまで西欧化に突き進みます。明治4年には廃藩置県が実施され、越後屋の得意客であった藩を失います。様々な改革の余波もあり厳しい状況に陥った越後屋は時の政府の勧告により三井家から分離されます。越後屋の危機です。

“どうする越後屋！”

この時ある智恵者が越後屋を救います。新たに「三越家」を興すことを画策し難を逃れたのです。智恵者の名は三野村利左衛門。彼がいなければ今の三越はなかったかもしれない。この時ロゴマークを“丸に越”に変更します。



ふたりの英雄

危機を脱した三越は明治25年、三井家に戻り、「三井呉服店」となり、商標を“丸に井桁に三”とします。明治28年には三井銀行から高橋義雄が迎えられ、実質CEOの役割を担います。

高橋は三井銀行在職中にアメリカの流通事情を視察、特にフィラデルフィアの百貨店ワナメーカーの店舗運営をつぶさに観察しています。

三越に着任するや否や矢継ぎ早にさまざまな改革に着手します。それは、座売りから陳列販売方式に、様式簿記の導入、意匠部・図案部の新設、日本初の商業PR誌の発刊、着物の流行柄の創出等で、特に流行を創り出すとい

う政策が「元禄ブーム」を引き起こす要因となります。高橋の改革のおかげで三井越後屋はアメリカ型の合理的な経営形態を導入し、かつ着物の柄に尾形光琳の「光琳模様」をあしらったことでその後の琳派との結びつきが強くなっていくことになります。そのひとつが尾形光琳の墓を90年間三越が守ってきたという事実、もうひとつが百貨店初の文化展が「光琳遺品展」であったということに現れています。



光琳の墓のある京都「泉妙院」



有名な尾形光琳作の国宝「紅白梅図屏風」も1908年開催の「光琳遺品展」で初めて三越に出品された

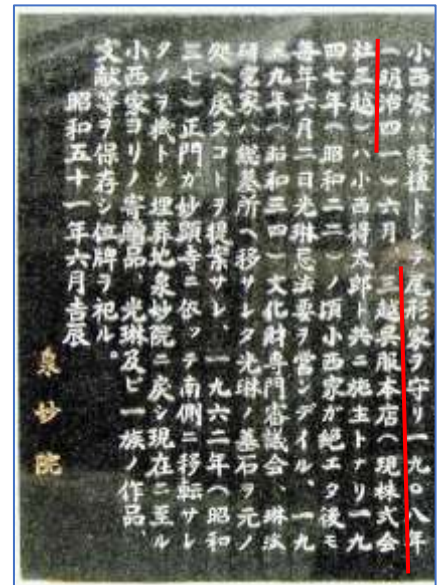


尾形光琳の墓石

もうひとりの英雄は、ご存じ日比翁助です。彼も明治31年に請われて三井銀行から転じ、高橋義雄とタッグを組んで三井呉服店の発展に寄与、その最大の成果が明治37年の「デパートメントストア宣言」です。日本初、近代百貨店の誕生です。この宣言後、三井呉服店は「三越呉服店」となりロゴマークも「丸に越」となり、多少の変更はあるものの現在に受け継がれています。日比は後に欧州視察に出向き、ロンドンのハロッズを訪れ、ハロッズをロールモデルとして三越を運営していく決意をします。その経営理念は、「百貨店は社会のために貢献すべき」。そのために文化的な催しを展開し、最高レベルの文化人による「流行会」を発足させるなど、すべてにおいて超一流を目指すこととなります。

この時代は日露戦争勝利に沸いており、西洋文化の吸収、新たな中産階級の出現等により上質な趣味を具現化してくれる百貨店の存在は大きなものでした。

文化展開催は現在にまで継続している日比イズムの一端で、さらに画期的な催事として「児童博覧会」など当時最先端の催し物を頻繁に開催していました。この「児童博覧会は、昭和58年に「こども博」として受け継がれます。



三越創業350周年記念特集 越後屋・三越物語



明治42年から行われていた三越児童博覧会



昭和58年にスタートした三越子ども博覧会

日比翁助に後を託した高橋義雄は、その後経済界を離れ「高橋箒庵」の雅号で茶の湯の研究に打ち込み茶人として名を成すこととなります。

イメージ戦略

もうひとり忘れてはならないスーパースターがいます。杉浦非水です。明治41年に囑託として招かれ三越のデザイン、イメージ戦略を一手に引き受けます。ポスター、PR誌などあらゆる場面で非水の作品は店舗運営上必要不可欠な要素となります。この時期には、後の我々世代でいうところの「売り場」「仕入れ」「宣伝」の“三位一体”のトライアングルが構築されていて、今に続く盤石な店舗運営のシステムが出来上がっていました。それには室内装飾の林幸平、広告の浜田四郎などの専門家集団の功績も大でした。

杉浦非水は日本のグラフィックデザインの先駆者で三越以外にも地下鉄のポスターを始め数多くの優れた作品を残しています。



高橋箒庵



大正3年10月 新館落成

三越創業350周年記念特集 越後屋・三越物語

建物

明治の末期になると東京の人口も急激に増え、様々なインフラ整備の必要に迫られます。三越も中央通りの拡張に伴い、13mセットバックすることを求められたのを機に、明治41年それまでの土蔵造りの店舗の西側に仮営業所を開設します。その後旧店舗跡地に鉄筋コンクリート造の大型店舗の工事に着工、大正3年「スエズ運河以東最大の建物」と謳われた新館が完成します。この新館がベースとなり、その後増築を繰り返し現在の三越本店になっています。



1908年(明治41年)仮営業所



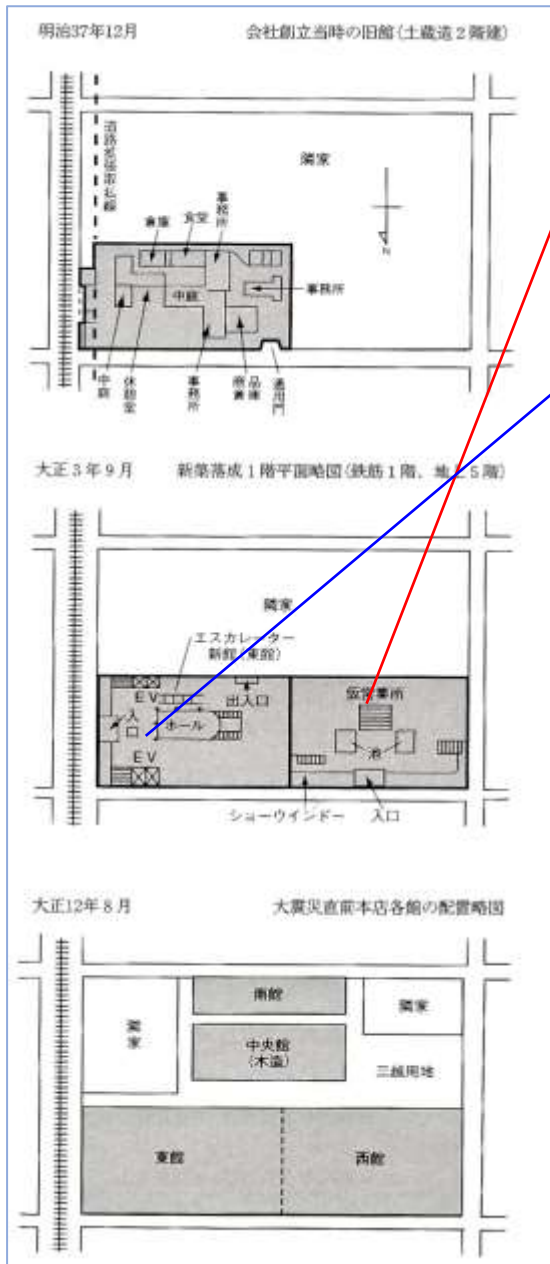
1914年(大正3年)新築落成



関東大震災直後の本店



1927年(昭和2年)震災後修築落成した本店



三越創業350周年記念特集 越後屋・三越物語

大正3年の新館落成に合わせてライオン像が設置され、名実ともに日本における百貨店のトップランナーとしての地位を確立します。大正12年の関東大震災後の復興はめざましく、昭和10年には中央ホールがほぼ現在の形に整備されます。中央ホールは今年で88歳を迎える事になります。昭和35年には株式会社創立50周年を記念した天女像が完成し、4月19日に除幕式が挙行されました。越後屋～三越の変遷は必ずしも順風満帆なものではなく幾多の困難に直面してきました。しかしその都度、創業以来の理念と知恵で乗り越えてきた歴史があります。



大正3年10月1日に設置されたライオン像



昭和10年 本店増築全館落成



昭和35年4月19日 天女像の除幕式



昭和10年 中央ホールの完成とともに7階にあったパイプオルガンを中央ホールに移設

今年は創業350年、昨年は三井高利生誕400年、来年は旧友会90年、これらのメモリアルイヤーに立ち会える幸せを感じています。来たる2024年が皆様にとって良い年となりますように。